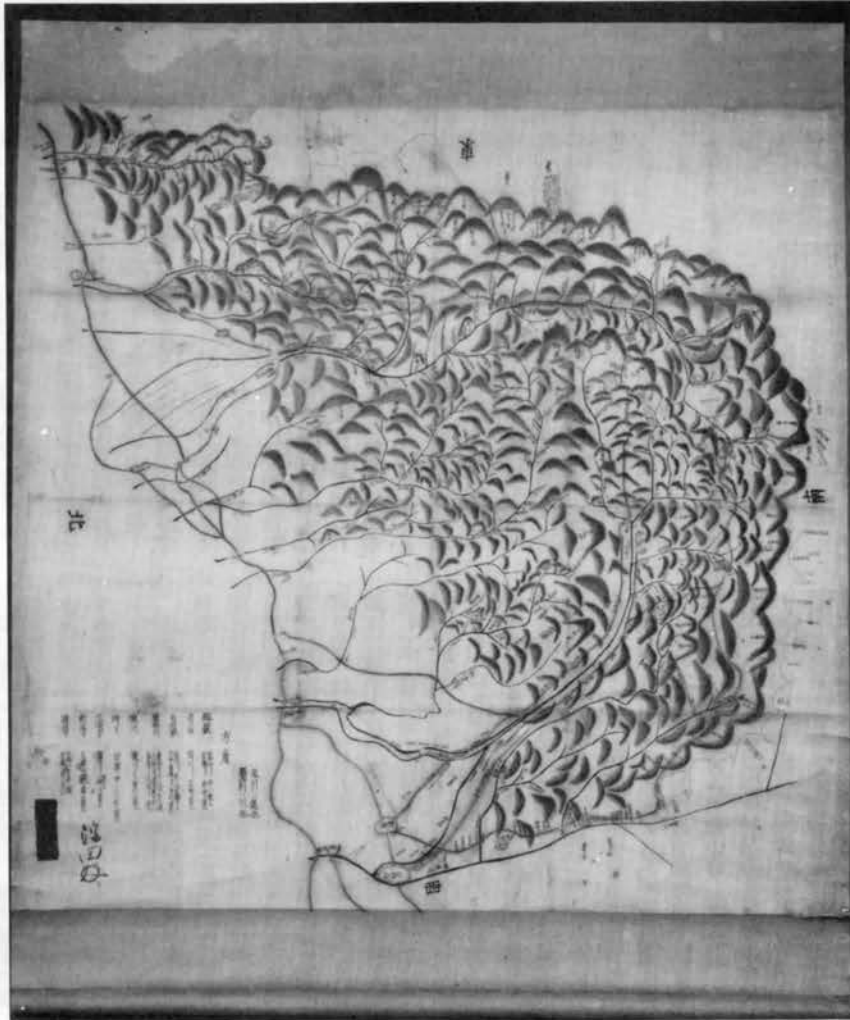


山と博物館

第38巻 第10号 1993年10月9日

大町山岳博物館

特集企画展「黒部溪谷―その人跡と自然にふれて」10/10～11/3



新川郡奥山谷々見取絵図
文化六年(一八〇九) 浮田寛右衛門作製(富山市郷土博物館蔵)

黒部展の開催にあたって

黒部川は富山県の東端に位置し、北アルプスの最奥部、鷲羽岳(二九二四m)に源を発し、立山連峰と後立山連峰の間をぬって南から北に流れ、日本海に注ぐ川である。

全長は八六キロ。長さにおいては、日本では中級の河川にすぎない。しかし、鷲羽、三俣蓮華、薬師、水晶、立山、劔、そして鹿島槍、白馬といった名だたる三千メートル級の高山から、年間平均降水量四〇〇〇ミリ以上といわれる豊富な水を集め、平均勾配四〇分の一という急勾配で、これほど深く険しい谷を刻んで流れ下る川は珍しい。

黒部の名の由来は、アイヌ語の「魔の川」、または黒々とした針葉樹の原生林に包まれていることから「黒辺」、またはこの谷に多いヒノキ科のクロベ(ネズコ)からだと思われるが、いずれにせよ「黒部」には、この溪谷の特徴をつかんだ独特の響きがある。

大町―針ノ木―黒部川―立山のコースは大正から昭和にかけて登山者でにぎわい、そして昭和三〇年代からは黒四ダムの建設、立山黒部アルペンルートの開通が続き、大町はまさに黒部の信州側の玄関口となった。市街地から一時間とかわらずに、誰もが黒部の核心部に達することができる都市は大町以外にはない。黒部と大町は後立山を越えて密接に関わっており、大変身近でなじみ深い溪谷のはずである。

しかし遠い昔、どのような人々がこの谷に踏み入り、またいかなる自然が残されているかについては、その身近さほどには知られていないとも思われる。

本企画展が、何らかのかたちで黒部を再発見する契機となれば幸いである。

(大町山岳博物館)

企画展『黒部溪谷—その人跡と自然にふれて—』

大町山岳博物館

展示コーナーごとに、簡単な説明を加えてみたい。

黒部のあらし

黒部の溪相は変化に富む。

源流域はのびやかな高山植物帯だが、すぐにアオモリトドマツの針葉樹林帯に入り、やがて両岸を垂直に近い岩壁が囲む峡谷が続く。奥黒部ヒュッテ付近、つまり東沢出合までのこの上流域は上廊下と呼ばれ、一部の源流部をのぞいて夏場の渇水期に熟達した登山者しか入ることのできない秘境である。東沢出



立山

合の約一キロ下流からは黒四ダムの人造湖となる。針ノ木谷の流入地点から上流は東岸に針ノ木峠方面、赤牛、水晶、鷲羽方面へ続く歩道が、ヌクイ谷の流入地点から下流は西岸にダム方面、五色ヶ原方面へ続く歩道があり、いずれもブナ林が美しい。この東西両岸の道は六月下旬から十月末まで、平ノ小屋の渡船で結ばれている。

黒四ダムから樺平までは下廊下と呼ばれる。黒四の完成によって仙人谷ダムから上の本流の水が管理され、かつての猛々しさは失われたといわれる。だが両岸の絶壁の底を、巨大な転石をぬって流れ下る壮大な峡谷美には、今だに圧倒的迫力がある。この間には旧日電歩道と呼ばれる本来電源開発のために開かれた登山道がある。残雪量によって全線の開通時期は毎年異なるが、関西電力による整備を終え、早くも八月末から一〇月末くらいまでの、わずか二ヶ月ほどしか歩くことはできない。岩壁に刻まれた六、七〇センチの道はスリルに満ちているが、十分な体力と基本的な登山技術を身につけていれば誰もがこの道を利用して、核心部といえる白竜峡、十字峡、S字峡に達することができることは、登山者にとって恩恵といえるべきだろう。樺平は宇奈月温泉を始発駅とするトロッキ電車で有名な黒部峡谷鉄道の終点である。ここから下流の黒部川は、日本一美しい形状といわれる黒部市の扇状地をうろおして日本海に注ぐ

まで、電力資源として、観光資源として、農業用水として様々に利用され八六キロの旅を終るのである。

ビデオ・コーナー

関西電力の協力による黒三、黒四建設の記録映画、山岳博物館とアルプススケイプルビジョンの共同制作による、主に下廊下を中心とする映像などを放映予定。

黒部奥山廻り役

江戸時代、後立山の稜線から西は加賀藩の領地だった。寛永一七年（一六四〇）、加賀藩三代藩主前田利常が、越中新川郡の松儀伝右衛門を内役という名称の黒部密入者の監視、警戒役にあたらせた。これが文献に残る奥山廻り役の始まりとされる。奥山廻り役の主目的は、越中と信州の境となる後立山連峰を巡視して、信州側の盗伐を防ぐことだった。

コースについては「上奥山と下奥山」とに区別されていた。上奥山コースは、立山一ノ越から黒部川を下り、針ノ木谷から峠に登り、針ノ木峠以南の峰々を縦走検分して、鷲羽・薬師・有峯をまわって下山するのであるが、年によつてはその逆コースをとることもあり、多少コースを変更することもあった。下奥山コースは、まず越後国境の下駒三山を検分して引返し、小川温泉から横山峠（コエド）を越えて入山し、北又谷・柳又谷・祖母谷などの谷々を調べ、上駒岳（白馬）に登って小川温泉にもどるのであるが、時には白馬以北の雪倉・鉢・恵振（朝日）の諸山を縦走し、時には祖母谷から南へ越え、東谷から鹿島槍頂上まで足を延ばすこともあったという（*1）。こうした毎年の定例的な山廻りは一六五〇年代から始まったらしく（*2）、江戸期を通して行われた。明治三〇年代以降の、



針ノ木谷出合



黒部ダム



日電歩道跡、今はトンネルを通過

黒部川の平は、後立山の針ノ木谷と立山のヌクイ谷が、下廊下の十字峽とまではいかないものの、近接して交差点のように出合う地籍だった。江戸時代、黒部は加賀藩の領地であり、立入禁止の御嶽山だったが、廻廻り役のみならず、立山詣でや山森伐採、狩猟などを目的に、密かに針ノ木峠を越え、この平で黒部に身をひたし、危険を冒して徒渉した信州人も少なからず存在したという。平は当時から、実質的な信州と越中の接点であり、要所だったのである。明治から大正にかけて、夏はイワナ釣り、冬場はクマやカモシカの猟に明け暮れ、黒部の主と称された野口村（現大町市平野口）の遠山品右衛門の根拠地としても知られる。

針ノ木と黒部と立山越えのルートはまた、

登山者による初登頂、初縦走時代を去ること二百数十年の昔から、黒部奥山は縦横に歩かれていたのである。

今回、廣瀬誠氏、富山県立図書館、富山市郷土博物館ほかの協力を得て、多数の奥山廻り関係資料を展示予定である。富山県外でのまとまった資料の公開は初めてであり、信州側の大町での展示には大きな意味があると思われる。展示資料のいくつかを紹介したい。

○新川郡奥山谷々見取絵図
文化六年（一八〇九）、浮田寛右衛門の作製。浮田家（富山市太田南町）は現存する唯一の山廻り役宅として国の重要文化財に指定されており、古い文書、記録類も多数現存している。本図には、山廻りの際の宿泊地を一泊ごとに◎◎◎と記入しており、巡路がわかる貴重な資料である。（富山市郷土博蔵）

○山廻り役任命状
これも浮田家の文化二年（一八〇五）の文書で、表題は「御算用奉行江上清左衛門等連署千石代官任命状」である。（富山市郷土博蔵）

○奥山御境目見通絵図
元禄一三年（一七〇〇）、山廻り役の内山村三郎右衛門ら三名が連名で作製し、加賀藩に提出した図で、奥山絵図として最も古いものの一つである。（富山県立図書館蔵）

○奥山御境目并谷々川筋略絵図
文化初年（一八〇四）作製と推定される絵図。「黒キ山は皆他国山なり」と注記して、越中以外の山は雲外に黒々と描かれているが、鐘ヶ嶽（槍ヶ岳）だけは名を記し、高く描かれている。色づかいや、山の表現において、芸術性のある名品とされる。（富山県立図書館蔵）

平の渡しをめぐって

信州と越中を結ぶ最短ルートであった。明治八年（一八七五）、金沢と野口村など信州側の有志は、交易ルートとしてこの道に注目し、開通社を組織して牛馬の通行も可能な幅三メートル近い有料道路、針ノ木新道（信越連帯新道）の開削に乗りだす。しかし、自然の猛威に維持、開拓の資金不足をきたし、明治一三年、ようやく全線が開通し営業を始めてわずか一ヶ月で廃棄に追い込まれる（*3）夢の有料道路であった。

この道路建設によって、平の渡し場には初めて渡河施設が設けられた。文献には刳橋と記されたものや、吊り橋を想像させる記述もあり定かではないが、いずれにせよ橋があったのである。これが新道の廃棄にともなって廃絶し、少なくとも十数年間は歩渉りに逆もどりする（*4）。明治中期以降、施設が復活、今度はワイヤーに滑車のついた籠渡しとなり、やがて同じ形式だが、籠にかわってプランコをついた渡しとなり、ついに大正一五年（一九二六）には電源開発の波がこまで廻り、日本電力によって吊り橋が設けられることになる。そして昭和三六年、吊り橋は黒四のダム湖に没し、消え去った。

このコーナーでは、平の渡し場の写真や、針ノ木新道の絵図「越信新道細見図」（中島正文写、富山県立図書館蔵）などを展示。

冠 松次郎
東京都出身（一八八三—一九七〇）
・明治四四年（一九一〇）、白馬岳から祖母谷を下り初めて黒部に接する。
・大正六年（一九一七）、立山大汝に登る。
この時御山谷出合の碧玉のように澄んで光る丸い淵を見つけ、下降の衝動にかられる。
・大正七年、一ノ越から御山谷を下降。平



黒部別山谷出合より赤沢岳を望む



黒部別山谷付近

方面、御前谷方面を探る。
 ・大正九年、宇治長次郎らを伴い、平から黒部別山谷出合付近に達し、若小屋沢岳から大町に下る。
 ・大正十四年、平まで下廊下の完全廻行に成功。十字峽を発見、命名する。

以後も黒部川や飯沢など様々な支流を踏査し、黒部川の全貌を初めて明らかにした。登山史上の黒部のバイオニアである。『黒部』『溪からの山旅』『わが山わが溪』『山溪記』(全五巻)など多数の著書がある。読者を引き込む独特の筆致によって、広く黒部を紹介した功績も大きい。黒部の父と称される所以である。本展では著書などを紹介。

電源開発にふれて
 黒部川は平均勾配四〇分の一の急勾配と、安定した豊富な水量のために、大正の初めから電源開発の上で着目され、下流から発電所の建設が進む。冠松次郎が黒部を廻行した大正一四年には、すでに宇奈月まで鉄道がひかれ、東谷出合上流まで棧道や歩道がつけられており、日電歩道の開削も始まった。高熱隧

道の掘削や志合谷宿舎を襲ったハウ雪崩など、困難と犠牲に満ちた第三発電所、仙人谷ダム、樺平―仙人間の上部軌道の完成は昭和一五年のことである。そして昭和三八年、壮大な黒四ダムの完成に至る。

大町の扇沢から後立山を貫通するトンネルをトリリバスで抜け、ダムに立ち、昭和四年には平ノ小屋―樺平間を全通させたという絶壁に穿たれた旧日電歩道を歩くとき、溪谷の迫力と開発した人々の気迫を同時に味わう人も多いはずである。本展では関西電力の協力で、黒四関係資料を展示の予定。

岩橋崇至氏の『黒部溪谷』写真
 本展では、黒部市吉田科学館の協力で、同館所有の岩橋崇至氏撮影の写真を多数展示の予定である。

これらは昭和六二年に山と溪谷社から出版された写真集『黒部溪谷』に掲載されている作品の一部で、七〇×一〇〇センチのパネルを中心に、豊三枚大の大作も含む。四×五判の大型カメラを担ぎ、三年間におよぶ単独行によって生み出された作品は、春夏秋冬、黒部全域にわたる力作である。芸術性もとり、高い描写性において黒部を知る資料としての価値も高い。

本展ではさらに、黒部のサル(赤座久明氏提供)、黒部湖の魚(富山県水産試験場提供)などについて、データの展示を計画している。



白竜峽

本展ではさらに、黒部のサル(赤座久明氏提供)、黒部湖の魚(富山県水産試験場提供)などについて、データの展示を計画している。



十字峽



十字峽付近の廊下

本稿に記した協力機関、個人のほかに、石坂久忠氏、坂本正氏、佐伯寛憲氏(平ノ小屋、富山科学文化センター)、富山県立山博物館の皆さん、北安中部漁業協同組合には取材中ご協力いただいた。また吉田科学館の飯田肇氏には特にお世話になった。記して謝意を表したい。

(*1) 『立山黒部奥山の歴史と伝承』

廣瀬 誠 桂書房

(*2) 『北アルプスの史的研究』

中島正文 桂書房

(*3) 『大町市史』第四巻

(*4) *1に同じ

《参考文献》

- ・『黒部川―その自然と人』 村上兵衛 日本経営史研究所
- ・『クロヨン』 足立巻一他 実業之日本社
- ・『黒部』第二号 日本黒部学会

(本稿掲載黒部写真は山岳博物館撮影)

山と博物館 第38巻 第10号
 一九九三年十月九日発行
 発行所 〒398 長野県大町市 TEL②〇二一
 印刷所 長野県大町市俵町 大糸タイムス印刷部
 定価 年額 一、三〇〇円(送料共) 切手不可
 郵便振替口座番号(長野四) 二二二九三三